

かなたへの旅

眉村 卓





集英社文庫

あなたへの旅

0193-750275-3041

昭和54年10月25日 第1刷

定価はカバーに表示してあります。

著者 眉村 卓

発行者 堀内 末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋2-5-10
〒101

電話 東京 (230) 6361 (編集)
(238) 2781 (販売)

印刷 凸版印刷株式会社

著者と了解のうえ検印を廃します。 (落丁本・乱丁本はおとりかえします)

© T. Mayumura 1979

Printed in Japan

目次

夜風の記憶……………	五
S 半島・海の家……………	四五
檻からの脱出……………	九五
乾いた旅……………	一四三
潮の匂い……………	一九一

解説 武蔵野次郎

夜風の記憶

その日の早朝に、港野伸一は新幹線で大阪に向った。

証券会社の団体が各地で投資家のために開く講演会があつて……K証券の部長をしている港野も、それに講師のひとりとして行くことになつたのである。

久し振りの大阪だつた。

生れ育つた地を離れて大阪の大学に入り、学生生活を大阪で送つたものの、その後奇妙に大阪とは縁がなく、今では東京に落着いてしまつてゐる。妻がふるさとの出身なので、田舎へはときおり子供連れで帰るが、大阪には仕事でたまに寄る程度だつた。

今回は、大阪でわりあいによく出来そうである。

せっかくの機会だから、今夜は大学時代の友人と会つて旧交をあたためるのも悪くあるまい——と、彼は思った。

自分の番の講演が終ると、港野はこれから用があるからとことわつて、会場をあとにした。

事実、用がないわけではなかった。大阪支社には朝のうちに顔を出しておいたからそれでいいが、ほかに、資料の整理や東京本社との連絡もある。

一度、ホテルに戻って、それらを片づけると、ちょうどころあいの時間になっていた。

大阪に着いたときに電話をし約束した、友人との待ち合わせ場所は、桜橋の近くのレストランである。そのあたりなら近頃も一、二度は行っていて勝手が分っているし、ホテルからも遠くはなかった。

気持ちのいい初夏の夕暮れだった。こんなときに何もタクシーに乗って、近距離ゆえにいやな顔をされる必要はない。

歩いて行こう。

歩くにしても、迷路さながらに複雑怪奇な大阪の地下街を、ひとりで通り抜けようとするのは、やめたほうが安全だ。

彼は地上に行くことにし、ホテルを出て夕風の中を歩きはじめた。

歩くといっても大阪駅前近辺のこのあたり、歩道橋を昇降したり、広い交差点を渡ったりしなければならぬ。それがまた、結構くたびれるし時間もかかるのだ。

かつて港野は、誰かが、大阪の町はたそがれどきが一番いいというのを聞いたことがある。日中の、商売商売で走りまわっている殺伐とした感じが、そのじぶんにはようやくおとろえ、夕闇が緑の乏しい町並みをおおって行きながら、とよりはじめたネオンが空に浮かびあがるからだ

——というわけであつた。それがこの地の人々の一般的な感覚かどうかは彼には分らないが、彼自身、アルバイトをして暮らした日々の記憶からいえば、當っているのかも分らないと思う。しかし、今のうちに、こう地上を歩くのが不便では、そんなこともいつてはいられないのだった。大阪はいつの間にか、地下を行き来する人の便利さを優先させるようになったらしい、と、彼は考えたりした。

それでも、十五、六分も歩くと、どうやら桜橋に来る。

約束の店はすぐに分つた。

友人の東川はすでに先に到着していて、彼を認めると、手をあげて見せた。

「よう連絡してくれたなア」

彼がむかいの席に腰をおろすのを待つて、東川はいいだした。「この前、きみと会つたんは、たしか、六年か七年前やで。それも大阪でやなしに、わしが東京へ出張したときやつたな」

「そうそう」

港野は頷いた。

かれらと同じクラスの者の中には、現在東京にいるのも多く、大阪弁と標準語まがいの言葉を使いわける人間がすくなくないが……この東川だけは、大阪弁以外、喋ろうとはしなかった。正確には大阪弁というより岸和田弁というべきかも知れない。大阪府南部の岸和田の、建てられてから二百年以上も経っているという旧家に今も住みつづけている東川は、ほかの言葉を使う気は

全くないようであった。

食事がはじまった。

ビールを飲みながらの食事である。

「これから、どこへ行くかな」

デザートが出るころ、東川がおいだした。

「そういえば……きみ、もうだいぶん長い間、ミナミへ行つてへんのと違うか？」

「そういえば、そうだな」

港野は答えた。

ミナミというのは、単に南の方向という意味ではない。道頓堀や千日前といった古くからの繁華街をそう呼んでいるのだ。大阪駅前を中心とする北部の繁華街をキタというのと同様、固有名詞なのである。そして、比較的スマートな感じでビルの多いキタが大阪の応接室とするならば、昔からの浪花の気分を残しているミナミは、大阪の奥座敷という観があるのだった。

「そらいかなで」

東川はいった。「わしら、教養部のときは南分校やつたんやから、もともとミナミに属する人間やろ？ ま、あの南分校はなくなつて、今は公団住宅が建つとるけど……学部へ進んでからも南分校組と北分校組ははっきりカラーが違うとつたもんなア」

一息おいて、

「行こや。ミナミでもうちよつと飲もや」

「そうしよう」

港野もいった。

いわれなくても、チャンスがあれば、彼はミナミへ行きたいところだった。と、いうのも、大
学時代、彼は南分校の、旧制高校時代の名残の寮に住んでおり、とぼしい仕送りをカバーして生
活費や学費をかせぐために、アルバイトに精を出さねばならなかったのだが……そのアルバイト
も、ふつうの家庭教師や引越しの手伝いなどだけではやって行けず、ミナミのアルバイト・サロ
ン——いわゆるアルサロの見習いバーテンダーとして、毎日夕方から夜中まで働いていた時期が
あったのだ。あのころのあの店はどうなっているだろう、と、ときどき思い出すことがあるのだ
った。

「ほんなら行こか。そやな……法善寺あたりへでも行こや」

いいながら、東川はもう勘定書きをつかんで立ちあがっている。

「おい、それはぼくが払う」

港野は手を伸ばしたが、東川はいやいやと手を振った。

「わしがここで会おう、いうたんやないか。たまに東京から来たきみに払わすわけにはいかんわ
い。それに、お互い、学生時代やなし……飲んだり食うたりする金位、どっちが出したって別に
こたえへんやろ。気にすんなよ」

「かし」

「今度東京で会うたらおごってもら。大阪はわしにまかしとき」
東川にそういわれると、彼はもう頑張るわけにはいかなかった。

2

ふたりは桜橋の角でタクシーをつかまえた。

車は桜橋から東行して御堂筋に入り、そこから南下する。

「このあたり、女の子とよう歩いたもんや」

並木のかなたの夜の歩道を見ながら、東川はいう。「このへんの、本町から心斎橋までは絶好のアベックコースや、なんていう奴もいよって……よう歩いたなア。今はそんなしんどいこと、あほらしくて出来んけど」

「……………」

港野は黙って聞いていた。昔のことをそんな風に手ばなしで回想する東川がうらやましかった。自分にとつての大学生生活は、苦闘の連続だったのだ。もちろんそれはつらいことばかりではなく、随处にきらりと光るたのしい思い出もあるが、それだけをとり出そうとしても、どうしても一緒にあのころのみじめな気分がついて来るのである。もっとも近年は、それらすべてをひっくるめて、なつかしい回想という感じになって来つつあるが……それでもいまだにべらべらと喋る氣に

はなれないのであった。

「あ、そのへんや。そのへんで降ろしてんか」

車が道頓堀橋を越えようとしたところで、東川が身を乗り出していった。

降りると、ミナミ特有の、すさまじいまでにネオンや広告板がひしめき人々が行き来する中、夜風が流れて来て、ふたりの頬を撫でた。

「こっち」

東川は右手を指し、いかにも自分の馴れた土地に行くという格好で、歩きだした。

戎橋筋と交差する、食堂やバーや喫茶店が並ぶにしては暗い通りを抜けると、法善寺の入口である。

「中、通っていこや」

東川はいい、先に立って法善寺に入っていく。

港野もつづいた。

正面の、水商売にことにご利益があるという水掛不動尊の前に来ると、東川はひしゃくで不動尊に水をかけ、まじめな顔で拜んだ。機械メーカーにいる東川と水商売とはおよそ関係がないはずだが、と、港野はおかしかったが、そこはつきあいで、彼も東川にならった。

そこから左方へ、抜け道を行くと、法善寺横丁だ。

東川は、はまべと書かれた立看板の出ている店に入った。

奥へ細長い店で、小料理屋のようである。白木のカウンターにむかう席は、七割がたつまっていた。

「あらお東さん、しばらくね」

客と客の間にすわっていた、着物姿の、個性的な顔立ちをしたママらしいのが、立ちあがって迎える。

「毎度毎度、やめてくれよ。お東さんとかお西さんとか、本願寺やあるまいし」

いいながら、東川は空いた席につき、港野もその横にすわった。

ママがやって来た。

「いらっしやい。——こちらの方、はじめてね」

「ああ、こいつ、港野いうて、わしの大学の同級生なんや。株屋で、東京にいよるんやけど、きよう来よってな。——こちらママや」

東川が紹介する。

「はじめまして」

ママは頭をさげた。

「よろしく」

港野も会釈を返す。

「東京へ行かれて、お長いんですか？」

ママがいう。

「だいぶになりますな」

彼は答えた。「おかげで、大阪へ来ることもあまりなくて……ことにミナミは……何年ぶりですかなあ」

「昔はよくミナミで飲まれたんでしょう？」

「学校を出たらすぐ大阪を離れましたからね」

彼はいった。「学生時代は学生時代で、酒なんか飲んでいる余裕はなかったですよ。アルバイトで追いまくられて……」

「そういえばきみ、何とかいうキャバレーで、ボーイをやっていたんやなかったか？」

東川が口を出した。

「へえ」

ママが面白そうな顔になった。

「キャバレーじゃなくて、アルサロですよ」

彼はいった。こういう場であまりそんな話はしなくなかったが、行きがかり上、一応は説明するほかなかった。「それに、やっていたのもボーイじゃなくて、パーテンダーの見習いです」

「あれ、何という店やったかな？」

と、東川。

「フロリダ」

彼はいった。

「そやそや、たしかフロリダいうてたな」

東川は頷いた。「けど……その店、もうなくなっただと違うか？」

「なくなった？」

「そうやなかったかなあ。何しろ、キャバレーなんて、もう随分行ってへんから、ようは知らんけど。もうキャバレーへ行く年でもあらへんし。ママ、知らんか？」

ママは首をかしげた。

「さあ……わたしは大阪に来てから日が浅いから」

「そうやったな。そういうこっちゃ」

東川は受け、話題はママが前にいたという神戸のことに移って行った。

神戸となると、港野にはまるで知識がない。

彼は話題がそれたのにいくぶんほっとしながら、東川とママが喋り合っているのにまかせて、

水割りをすすった。

そうしていると、やはり、妙な気もするのだ。

考えてみれば、法善寺横丁で飲むというのは、これがはじめてである。学生時代によくこのあたりを通ることは通ったが、それは酒を飲むためではなかった。だいたい、こういった有名な場